「逃げちゃうのね。逃げちゃったのね。惨めで弱くて醜い私」
彼女―心の中の穢れ―は、怪しく笑いながら背中から抱きしめるように天乃の体に纏わり付くと、人間とは思えない冷たい体、愛情の感じられない優しさのない手つきで両肩を掴む。天乃と同じ体格ゆえか、天乃は背中に冷たく柔らかい感触を感じて。
「止めて……」
「やめない」
なにをされるのか、何をしようとしているのか、彼女は天乃自身であるがゆえに言葉が無かったとしてもわかってしまう。
いや――彼女がわざと、伝えてくる
抵抗のために動かそうとした手は、動かない
彼女は肩から手まで手を滑らせると、上から手を握り締めて、耳元に顔を近づける
「嫌なら抵抗したら良い。嫌なら、突き放せば良いの。でも、貴女はそれが出来ない。だって、貴女はただの箱だもの」
「箱……っ！」
握られた左手は抵抗できずに連れて行かれ、無理矢理に胸を握らされた天乃が心地良さのない精神的な痛みを感じて呻くと、「ほら」と、彼女の甘く蕩けた声が響く
「貴女はただの肉欲の入れ物。それ以外の価値なんて無いの」
「違う……」
「違わないわ。だって、違わないから、貴女はただただ、みんなの愛……ううん、性欲を受け止めているんだもの。それを受け止めてあげるから一緒に居てと、引きとめているんだもの」
彼女は天乃の手を離すと、今度は天乃の乳房を自分で鷲掴みにして人差し指と中指の第二間接、その骨の出っ張った部分で乳頭を捻る
「っ……」
冷たい手の思いの無い触れ合い、しかしながら柔らかな乳房を揉みしだく力は東郷のように慎重で優しく、隆起していく突起を捏ねる指は、沙織のように大胆でありながら繊細で。
「んっ、っ……」
「あら。そんな声を出してどうしたの？」
思わず上げた声に、彼女の愉悦に満ちた声がぶら下がって、彼女の左手の動く力が割り増しになっていく。マッサージのように揉むだけだった手は、指の一つ一つがそれぞれ別の行動を始めて、出ない母乳を求めて搾り出そうとしているかのように、乳首の方へと、乳房は押し伸ばされては弾力で戻り、また押し伸ばされていく
「っ、ぁっ……っ」
彼女の手は冷たい。愛も無い。けれど、揉みしだかれていく左胸は段々と熱を帯び始めて、じわじわと体へとぬくもりを広めていく。その体温の上昇を感じた彼女は天乃の耳たぶをぱくりと咥えて、舌先でちろりと舐める

「ほら、貴女は求めてくれるなら誰のだって良いの。誰がしてくれても平気なように、貴女の体は淫らに出来ているの」
「違――ぁっ、んっ」
「ほら、自分の声が聞こえない？」
「っ、んっ」
彼女は嘲笑しながら、ただでさえ感じる羞恥心を煽るようにぼそぼそと話し、
屈辱感を余計に煽るように否定させ、そのたびに敏感に感じる部分をせめて、天乃の嬌声を搾り出す。
（感じたくない、嫌、悔しい、こんなの……）
その反抗的な気持ちを踏み躙るように、彼女の右手は天乃の口元に触れると、上下の唇の中央、その割れ目に指先をねじ込んで、歯を押し込む
「ぅ、ぅ……」
「その固さは、その狭隘感は貴女の拒絶」
「っ」
なにをされるのか、頭の中にイメージが入り込んでくる。指を突っ込み、舌を追い回して引っ張り出して、惨めで屈辱的な責め苦を与えるつもりだと、彼女が嗤う。だから、天乃は嫌だと口を閉ざす。彼女の胸への哀撫を受けながら、嫌、嫌、嫌……と拒絶する。
天乃にとって、キスは心を通わせるための一つの手段。好きな相手にキスをして、自分はこう思っているのだと、伝えるための……
「だから、私はそれを砕くのよ」
「ぅ――っぁっぁぐっ」
熱を帯び、火照って一際敏感になりつつあった天乃の左胸、その乳頭を抓みながら、ねじり、痛みと心地よさを共存させて強引に口を開かせた彼女は、そのまま指をねじ込んで、天乃の舌を引っ張り出す。わざと強く、わざと遠くに。
「ぁ、ぇ、ぁぅ……」
舌を引っ張り出されてはまともに話せない、呼吸だって危うい。
それが引き出せる限界まで引き出されるものなら、だらしなく舌を伸ばした犬のように首が伸びる。そんなみっともなくて、可愛らしさの薄れた惨めな姿を、彼女は嗤う
「ここには、どれだけの思い出があるのかしら」
夏凛とのキス、沙織とのキス、東郷、や友奈、樹、風、園子に悪五郎。みんなとの大切な思いを分かち合ったキスの感触がある
「全部、踏み躙ってあげる」
「っ、ぅぅっ！」
その思いで全てを磨り潰すように、彼女は天乃の舌を指で玩んで、刻み込む、教え込む。
天乃が痛みと、複雑な心境に泣き出して、呻いても。彼女は徹底的に蹂躙して、唐突に手放す。

「ぁ、ぃ……」
乾き、ヒリヒリとした痛み、彼女の指先の指紋のざらつき、押しつぶされていく圧迫感、持続するその蹂躙の烙印に、天乃は舌を戻せないままで。
彼女はそんな天乃に唇を重ねると、舌と舌を触れ合わせ絡めながら、天乃の口腔に舌を捻じ込んで、わざとらしく淫猥な音を響かせながら離れる
「っ、ぅ……ぁ、ぁぅえ」
「なぜこんなことをするのか？ 私が貴女を嫌いだからよ」
ベッドに倒れ伏して涙を零す天乃を前にして、彼女は愉悦に浸った笑みを浮かべながら、天乃の胸を両手で掴むと、また、マッサージを擦るかのような、愛撫にも似た穏やかな手つきで撫で回しながら、ぷくりと主張する乳首を、舌先で転がす
「んっ、っ、ぁ……」
怒りと憎しみ、痛みだけの扱いから一転したそれは、たとえ愛情が感じられないのだとしても、今の天乃に心地よさを感じさせるには十分で、羞恥心を抉る心地よさに声を出してしまう天乃は涙を零しながら、首を横に振る
けれど、彼女の手つきに体が火照る。赤ちゃんのように強引に乳頭へと吸い付いてくる感覚にビリビリとした感覚が迸る。嫌な気持ちに心地よさが紛れ込んで、喘ぎ声が溢れていく
「っは……ふふっ、ほら。解る？ 自分の顔が」
彼女は嘲り嗤いながら、どこからとも無く持ち出した鏡を天乃の正面へと持っていく。
（見たくない、みたらダメ、こんなの……絶対……）
心がそう拒絶しても、その声が聞こえてしまう彼女はあざ笑う。無駄な抵抗だと、苦笑する。その彼女の笑みの理由、その意味も、天乃には伝わってしまう
解っているのだ。自分がどれだけ惨めなことになっているのか。
顔は緩んで、口元からは涎を零し、瞳からは涙が溢れて頬を伝っている。そんな、醜く歪んでいると、解っているのだ
彼女の舌のいやらしいぬめりが天乃の乳首を舐めあげてくにくにと玩ぶ。体の火照った天乃には、その冷たささえ心地よくて、嫌悪感と共に流れ込んでくる心地よさに、声が押し出されていく
「ぁっ、んんっ……っ、ぁ――んっ」
嬌声を漏らす唇に柔らかな感触が重なって、戸惑う舌が、ざらりとしていながらぬめり気のあるそれに絡め取られていく
味見されていた胸は解放されたけれど、舐められた肌に自由に吹く風が切なさを振りまき、誘惑するように震えた胸を、彼女の手が揉みしだく
瞑った瞳は闇しか映さない。だから、その手、そのキスは愛おしい人に切り替えてしまう怖いから、悔しいから、辛いから。

「っぁっ、ぁっんっ」
「んっ……んぁ」
口の中に溜まりだした唾液を、そのまま天乃の口の中に流し込んでいく。これは穢れの塊。食してはいけない、毒りんご。けれども頭の働いていない天乃はそのまま飲み下す
「ぁ……んっ」
すっかり火照った体、抵抗力を殺がれ投げ出された両手、荒々しく、熱っぽい吐息をこぼし、震える唇、呼吸のたびに揺れる乳房
流れるように目を通した彼女は、天乃の胸に触れていた手を、そのまま下にずらして、腹部を撫でる
脇腹のほうには指の関節まで、手の平で臍周りを解していく
「ぁっ、っ……ふ……ぁ」
「貴女は淫らな女の子。肉欲が、貴女の大切なもの」
両脇腹を指で揉みながら、筋肉の解れた腹部中央に舌を走らせて、臍の窪みに舌を埋めるくすぐったさに天乃は呻いたけれど、関係ないと、彼女は舌を這わせてぬちゅりと音を立てつつ、臍の窪みを指で押し込む。空間に響く艶かしい音に、天乃の顔が悦楽と羞恥心に歪んでいく
「ほら」
彼女は小さく囁くと、前触れも無く天乃の下腹部へと手を忍ばせて、撫でる
「んっ！」
愛しいわが子に触れるかのような、穏やかで優しいそれはまさしく愛撫で、最初こそ緊張してこわばった天乃の体は緩やかに解れていく。
それどころか、押しつぶされるような刺激を受ける快楽の隆起物から快感を受けて、天乃は思わず喘ぎ声を上げてしまう
「んっ、っ、ぁっぁっ……んんっ」
「もっと感じて、貴女がどんな子なのか。どれだけ、惨めな子なのか」
「や……ぁ、っ嫌……っ」
彼女の耳打ちに、拒絶を示す。心が堕ちたわけじゃない。体だって、まだ
一度彼女からの接触を愛しい人のものと考えてしまったがゆえに、悦楽に浸ってしまうことはもはや防ぎきれない。しかし、それでも、天乃は抵抗する。
だが、彼女はそれが望んでいたことであるかのように噛って、中指を膣口に挿入する
「ひぁっ」
ぬちゅりと音がする。中ではなく入り口の縁をすり減らされていくような感覚が、空っぽになりつつある頭に直接浸透する。阻むものの無い快感は、痛くて、心地よくて
「ぁっ、んんっ、っ、やっ、嫌っ、嫌っ！」
「貴女は淫らなのよ。みんなの性欲の捌け口になることが嬉しいの、それ以外に価値が無いから。それを生き甲斐にしているの」

否定する、拒絶する。逸れは違う、そんなことはないと。
けれど、彼女の中指が出入りするたびに響く淫猥な水音が、突き抜けていく心地よさが、逸れに喘いでしまう自分自身の体が、天乃の否定を否定する
「んっ、くっ、っぁっ……嫌っ、嫌っ……」
昇ってくる。沙織や東郷、夏凜達としたときに感じた、頭の中ではじけるあの感覚、一度はみっともない粗相さえしてしまった、あの感覚
そこまで到達したら敗北だとわかっているのに、体の昂ぶり、悦びに歯止めが利かない
「止めてっ、やめてっ、嫌っ、嫌っ！」
嫌だ嫌だと拒絶するたびに、体中の神経、その一つ一つがそのリンクを切り離して下腹部と直結してしまったかのように、挿入感がより鮮明に脳裏を犯す
「貴女は……箱」
「いやっ、ぁっ、んっ、んんぅっ」
何もしていない左手で天乃の頬を撫でながら、彼女は否定しながらも快感に喘いでしまう醜い少女に、優しく囁きかける。
それは悪魔の言葉。
天乃の心を折るための一言
「九尾が言った売女はね？ 貴女のような、肉欲にまみれた子のことよ」
「えっ」
「九尾は知ってたのよ。貴女はそういう、人間だって」
時間が止まったかのような感覚だった。音が消え、快感が失せて、体の熱さえなくなり、望遠鏡をのぞいたかのような、視界が一瞬で狭まっていく。見えるのは真っ暗な闇だった。
九尾が言う、売女。と、球子が言う。悪五郎が不快感を示していたと。
それはつまり、そう言うことなのだと、頭が理解する
嘆き苦しみ、考えを破棄した頭が、心が、丸裸にされて
「偽りに、さようなら」
「ぁ――」
肉欲の入り口で彼女の指が不意に曲がり、天乃の内部を突き上げた瞬間今までの快感が、今の一瞬、奪い去られていた心地よさが集約して押し寄せてきたかのような、そんな、耐え切れないものを感じて、頭の中が爆発したように吹き飛ぶ
「いやぁぁぁぁぁぁぁあああああああっ」
痙攣したように強く腰を浮かした天乃は、絶叫し、絶頂し、愛欲の涙を迸らせて、ベッドへと落ちる。
「ぁっ、ふ……ぁっ、はっ、かっ……」
ビクビクと痙攣する天乃の陰部に指を挿入したままの彼女は、クスクスと嗤って
「ぁやっ……やめ……ひきっ――っぁぁぁぁぁああああああああああっ」
一度目の崩壊の余韻さえ収まらないうちに、天乃の胎内を穿ち、犯した

「かはっ、ぁっ……ぁっ、いっ……かひゅ……」
理性の大崩壊を積み重ねて受けた天乃は、ベッドの上で仰け反ったまま過呼吸気味に荒々しく乱れた呼吸をしていた。まだ果てた感覚は抜けず、誰かが動いたような微かな風の触れる感覚さえ激しく震える。そんな天乃は足を大きく広げたままだが、動けるわけも無くて、彼女は天乃の顔を上からのぞいて、嗤う
「解った？　自分がどんな人間なのか」
「ぁっ……ぅ」
「まだ、解らない？」
天乃が反応できない事を知りながら問いかけ、声にならないうめき声を漏らした天乃に怒りにも似た感情を見せて、淫らな匂いが染み込んだ手を天乃に見せる
「あと、何回やれば良い？」
「ぁ……や……」
かすれた声、止め処なく流れ落ちる涙、そんな頭を横に振って拒絶する。足が動くなら逃げたかった。せめて、受け入れるように開いたままの状態は何とかしたかった。でも、出来なくて。
懇願する涙を流す天乃に彼女は微笑むと、涙を舐めとって唇を重ねる。下を捻じ込まない、子供のようなキス。
そして離れて、もう一度唇を重ねると、今度は舌を捻じ込んで、舌と舌を触れ合わせ、絡め合わせる
「んっんっ」
「んぁっ、んっ……ふ」
キスしながら、手を握る
夏凜がしたように、沙織がしたように、東郷達がしていたように
恋人達と同じことをすることで、壊れかけた天乃の心に寄り添う
「っは……冗談よ」
「ん……」
「もう少し、優しくしてあげる」
彼女はそう言うと、天乃の腹部に手を置き、びくびくと怯えたのを感じながら、上へと上って乳房を下乳から持ち上げるようにも見上げながら、馴染ませるように撫でる。撫でながら、キスをして、唇同士のにゅぷりとした音に微笑んで、また唇だけのキスをする
「っ、ぁっ……はぁっはっ……んんっ」
宥めるような手つきで撫でつつ、時折、乳首を捏ねるように指で押し伸ばしていく
だが、そればかりに集中するのではなく、火照りすぎた体をただの発情状態へと戻すために、キスを織り込む

「落ち着いてきたでしょう？」
天乃が流した淫らな涙が冷たい水へと変わる頃、その空間は淫靡で淫猥な臭気に包まれていたが、慣れてしまった二人にとってはまったく気にならないようで、彼女の左手を天乃の右手が繋がって、唇同士が繋がって、胸同士が押しつぶしあう
「はぁっ、はっ……ぁ……ん」
「ふふっ、下。触るわよ」
熱の篭った吐息を漏らすだけの天乃を一瞥した彼女は、もう一度天乃の下腹部に手を伸ばして、今度は慎重に、繊細な手つきで陰唇の周囲をなぞる
ほんのすこしだけつめを立てて、まだまだ幼く、無い毛をそり上げるような感覚で指を滑らせていく
「んっ……っあっ……はぁはぁ……ぁっ」
「ふふふっ」
さっきとは違って抵抗無く受け入れて、心地よさに喘ぐみっともない姿を眺めながら、彼女は嘲笑したい心、煽りたい心を押さえ込んで、天乃を愛している【ふり】をする。
まだ、天乃には抵抗心があるのだろう、どこかでダメだと思っているのだろう。淫欲に浸っているにも拘らず、天乃の涙は流れていく。それが、彼女にとっては何よりも愉快だった
（もはや、心も体もばらばらね……）
「ふふふっ」
久遠天乃という精神面での穢れのみだった無垢な体を、隅々まで穢し、淫らで不浄なものに作り変えていく感覚
その完成が間近に迫っている感覚
「まずは、指を入れるから」
「んっ！」
指に開かれた割れ目は、くちゅり、ぬちゅぁ……っと、粘つきがあるような、淫靡な音を立てながら篭った熱気、艶かしい匂いを放つ。そのいやらしさには、彼女も思わずごくりと息を呑む
「っぁっ、はっ、あっ……あぁっ」
中指にくっつけながら、人差し指も一緒に挿入していく。狭い膣口は愛液によってぬめり、思ったよりも用意に挿入を許したが、その窮屈な感覚は、身動きを許さないほどで
「ぁっんっ、っ……はっ……」
「ほら」
「んんっ……ぁぁぁっ」
敏感なままだった天乃は、彼女の上下に動いた指の刺激に押し負けて嬌声を上げると、また、快楽の先を垣間見て、呼吸が乱れる

「ほんの少し、動かしただけよ？」
「はぁっはぁっ……んっ……」
「淫らな子……流石、愛欲の投棄場所」
耳元で囁いた彼女は、上の空で言葉を上手く聞き取れていない天乃に微笑むと、
挿入した二本の指を中で広げて閉じて、広げて、閉じて、ゆっくりと上下させていく
「はっ、はっ……はっ……ぁっ、んっ、んんぅっ」
ぬちゅぬちゅと、ぐちゅぐちゅと
生々しく淫らな音が、天乃の嬌声交じりの喜びの吐息に混ざっていく
最初に噴出させた淫らな液体が天乃の下腹部で乾き、てかてかとし始める中、
改めて溢れだす潤滑液が空気を孕んで新鮮な音を出し始める
「三本目」
「やっ……まっ」
「待たない」
「んんんっ！！！」
人差し指、中指そして……薬指
三本目まで挿入をされた天乃は、叫びそうな口を手で押さえて、喘ぐ
自分の淫らな部分が掘り起こされていき、もう完全に声が抑えられなくなってきて、
自分が彼女の言うような人間なのではないかという考えが生まれ始めると、体の昂ぶりが
まして、震えるような快楽はより強くなっていくような気がして。
怖いと思った。だが、嫌だと、なぜだか思わなかった
彼女の三本の指が少しずつ開いていくと、彼女の作り出した異物が捩じりこまれて、下腹
部の奥、膣の手前、処女幕と呼ばれる部分だろうか、ピリピリとした痛みが体に走る
それは、本当に良いのか。という警告だったかもしれない、それは間違いではないのか？ と
いう問いかけだったかもしれない。しかし、天乃は考えることができなかった
「あっんっ、っ、はっ……ぁっ、んんっ」
気持ちよさが、走り抜けていく
警告を、疑問を、押し流してしまう
「――おわり」
何かが裂けてしまう感覚が、胎内から滲み出てきた
「ぁ……」
流れ出ていく何かは、天乃の冷静さを欠いたからだの熱を少し奪って、取り戻す。
それは、あまりにも残酷な、幻想からの回帰
「貴女の純潔は、穢れたわ。もう、貴女は私じゃない。私が、貴女になる」
「んっ……っ、ぁっ、んんんっ！」
悪意のある笑みで双告げた彼女は、溜まっていた心地よさを一気に穿ち、果てた天乃を一
瞥すると、容赦なく、挿入していた指を引き抜く

「ふふふっ」
赤白く汚れた指
それは、久遠天乃を奪い去った証
彼女はその淫らに穢れた純潔を天乃の唇に塗ると、
唇を重ねて、心も、体も、溶け込ませていく
「ぁ……んっ」
「……」
最期の抵抗のように震えた天乃の体を、彼女は抑え込んで――キスをする

◆

声がする。怒っているような、焦っているような、
激しく攻め立てられているかのような、声
体が震える、いや、揺らされて……
「天乃！」
「っ……ぅ？」
声の主、三好夏凜は天乃が目を覚ますと、緊張感にこわばっていた表情を安堵に崩して、「良かった」と、呟く。何事なのかと天乃が理解できずに首を傾げると、
「気づかないの？ あんた」
「え？」
「びしょびしょ……ってか、あんた寝ながら自分でヤるって。馬鹿なの？」
「え？」
続く疑問符に答えるように、寝巻きと下着の中に突っ込んだ右手、太腿や下腹部などの下半身ほぼ全域から、お漏らしをしてしまったかのような危険なものを感じて、そして、ハッとしたように目を見開く
「なに、これ……」
「なにって、自分でやったのよ。あんた。急にうなされたかと思えば、ほんと……どうしたら良いのかわかんないし、叩いても何してもだめで……ほんと、どんだけ欲求不満なんだっての」
怒ったように言いながら、夏凜は「なんともない？」と不安げに聞いて、天乃は「気怠いけど平気」と、うそぶく

「お風呂入れてあげるわ」
「あら、優しい」
「優しいも何もあるかっ」
淫らな匂いの漂う部屋、はだけた胸元、見える白き柔肌は、夏場などと無関係なほどに艶がかっていて、夏凜は吸い込まれそうな視線を何とかそらして、頬を掻くけれど、そんな仕草を見た天乃はくすくすと、茶化すように笑って
「ねぇ、夏凜」
「な、なによ」
「……私、まだ体が火照ってるの」
「は、はぁ！？」
忍耐力のある夏凜だが、その言葉の意味が分からないほど初心ではなくて、しかし天乃からそんな言葉が出てきたと言う驚きに思わず素っ頓狂な声を上げてしまうと、袖が引かれ、釣られた視線が上目遣いな【彼女】と出会う
「ほら」
ベッドへと大の字に倒れ込んだ天乃は、第三ボタンまで寝間着をはだけさせると、妖艶な笑みを浮かべて、「夏凜ってば」と、どこか呆れたように言う
「満足させて？　お願い……えっちが、したいの」
「……あんた」
何かが違う。何かがおかしい
そう思った夏凜だったが、上手く言葉に出来なくて、歯噛みする
もしかしたら穢れが以前のように求める側に傾いてしまったのかもしれない
拒否するのは、可哀想かもしれない
そんな考えが、湧き出して
「わ、分かったわよ」
体が動く。【彼女】と、唇を重ねる
受け入れるように伸び、身体にまとわりついてくる天乃の体は温かく、そして、淫欲にまみれた甘く蕩けるような匂いがして
「……いただきます」
彼女は囁く。目に見えないどこかにいる。誰かへと。
勝ち誇ったような、怪しげな笑みを――彼女は浮かべていた

～END～